

## 教育学部 学校教育教員養成課程 令和5年度「大学入門ゼミ」実施報告書

松下 幸司(教育学部附属教職支援開発センター)

令和5年度の大学入門ゼミは、令和4年度から1クラス減じた6クラス編成(1クラスあたり学生数:28名×2クラス+29名×4クラス)で実施した。教育学部学校教育教員養成課程においては、1~6組の授業教室が前期「大学入門ゼミ」のみならず、後期実施の「教職概論」(学部実地教育科目)までを通して“ホームルーム教室”となるよう、講義室調整を行った。併せて、担任教員の学生指導のクラス間連携を図るとともに、学生にも初年次教育の一体感・一貫性を感じさせるため、ホームルーム教室となる講義室を、中庭を取り囲む4・5号館2階に、クラス番号順に並ぶよう集中配置して実施している(1組 421・2組 422・3組 423・4組 526・5組 525・6組 523)。また、6クラスの偶数组数での編成とすることで、1・2組、3・4組、5・6組の2クラスを「ペア学級」とし、弾力的な学習活動と学生指導ができるよう工夫した。(指導体制としては、各クラス1名の主任任が主に学生指導を行い、2クラスに1名の副主任任が、主任任の指導サポートを行う体制とし、教育学部1年次生全体を9名(+全体コーディネート1名)の教員が指導を担当している。)併せて、415講義室を全体授業講義室とし、教育学部教員養成課程1年次生の全クラスの学生が一同に会して、対面で授業を実施できる体制としている。

本学部学校教育教員養成課程における令和5年度前期「大学入門ゼミ」の授業計画については、4月10日実施の初回授業において、オリエンテーションとして学生に周知を行った。その際、事前に moodle「大学入門ゼミ」コースページに授業計画の pdf ファイルを掲載しておき、moodle へのアクセス方法を周知し、学生一人ひとりがアクセスすることによって、1年次生全員の moodle 閲覧スキルを確認した。併せて、本科目後半で実施する附属学校園訪問に関する希望調査についても moodle アンケートフォームを活用して初回授業で実施することを通して、moodle アンケートフォームへの入力・課題提出のスキルについて周知・確認し、他科目における課題提出の操作に早期に慣れる機会とした。

全学共通コンテンツについては、共通コンテンツに関連するミニ演習を円滑に実施・指導できるように、令和3年度より実施体制に工夫を加え、415講義室で一斉授業を行い、2名教員がティーム・ティーチングで指導にあたることとした。1つの共通コンテンツを担当する2名の教員のうち、1名は前年度担当した教員が2年目担当を行い、残る1名は、本年度新たに「大学入門ゼミ」を担当する教員が担当指導を行う体制をとっている。これにより、2年目担当教員が初めて担当する教員に、共通コンテンツの内容や指導方法を伝達・共有(=伝承)することができる。すなわち、2年目の教員が主担当として全体指導にあたり、本年度初めて「大学入門ゼミ」を担当する教員が副担当として、学生の個別指導などにあたる方法である。令和2年度までは2名の教員が2つの別々の集団を指導する方法で実施していたが、このようなチーム・ティーチングで指導にあたることにより、2名の教員が別々に授業を実施する方法に比べ、1人ひとりの学生へのより細やかな対応・指導が可能となった。併せて、令和4年度より、「大学入門ゼミ」を初めて担当する教員が副担当として授業に関わることによって、「授業に参加しながら、共通コンテンツの内容・指導方法を理解する」徒弟的な伝

達・共有(=伝承)が可能になることを期待し実施している。

教育学部「大学入門ゼミ」における全学共通コンテンツについては、附属学校園訪問の日程調整との兼ね合いから、附属学校園訪問を挟むように表1の日程で実施した。特に「レポートの書き方」については、他科目授業などにおいてもレポート課題が多く出されることが想定される連休前に実施することとした。

また、前期後半の授業においては、「学校園を『探究』しよう」と銘打ち、受講生一人ひとりが、幼稚園・小学校・中学校に関する探究課題を設定し、文献調査・インターネット上の情報リサーチなどをふまえ、報告書にまとめ、プレゼン発表を行うという一連の学習活動を行った。この探究活動は、既習の共通コンテンツ①～④で得た知識・スキルを活用して取り組む学修機会として位置づけ、共通コンテンツを通して得た知識・スキルを「自分のものとして使える知識・スキル」に高めることを目指して実施した。(これらの探究活動については、2020年度、大学入門ゼミFDとしてオンライン授業公開を行った授業をベースに、さらに改善し実施したものである。)併せて、昨年度(令和4年度)は第12回(6/20)以降において「学校園を『探究』しよう」に取り組んだが、学校園に関する探究活動に向けた学生の意識化をより早期に図り、問題意識・探究視点をもって学校園訪問ができるように、本年度(令和5年度)は、第7回(5/08月)の授業で「学校園を探究しよう」の全体説明と探究課題の設定を行った上で、附属学校園訪問を経て、学校園に関する探究活動に取り組む授業の流れとした。

教育学部においては、moodle等とは異なる「授業支援システム」を、学生が授業において活用しながら受講することができるよう、昨年度より整備をすすめている。これは、GIGAスクール構想により全国の国立・公立・私立の小・中・高等学校に整備されているタブレット端末とともに、授業において活用するために整備されている「授業支援システム」と同様の環境である。教師を目指す上で、現在全国の学校に整備されている授業支援システムを1・2年次のうちに「自らが活用して学ぶ」経験を通して、3・4年次で「授業で活用して指導することができる教員」としてのスキルを高めることを、教員養成における指導に位置付けることが重要だと考える。本年度も継続して、この授業支援システムを、共通コンテンツ①～④で得た知識・スキルを活用して取り組む学習活動「学校園を『探究』しよう」において活用することとした。

これにより、オンライン授業・対面授業に依らず、授業を担当する教員と学生との情報共有だけでなく、受講する学生相互の情報共有が容易になった。昨年度(令和4年度)は6月に入り、新型コロナウイルス感染症の感染拡大傾向が認められたため、安全に配慮し、「学校園を『探究』しよう」の最終プレゼン発表活動の授業回をオンラインで実施せざるを得ない状況が生じたが、本年度(令和5年度)は5月に新型コロナウイルス感染症の5類移行を受け、また感染の拡大も認められなかったことから、「学校園を『探究』しよう」の最終プレゼン発表活動も、徐々に完全対面形式にて、クラス単位で意見交流を挟みながら実施することができた。発表を聴く学生たちは、前方スクリーンに提示された資料を見るだけでなく、オンラインでデータ共有された「授業支援システム」上の資料を相互閲覧し、必要に応じて資料を拡大したり前ページのスライド資料と見比べたりしながら、発表を聴いている様子が見られた。今後も引き続き、大学授業における授業支援システムの有効な活用方法を模索していきたいと考える。

以上のように、本年度は共通コンテンツを含め、4年ぶりに「大学入門ゼミ」の全ての授業を対面形式で実施することができた。(一部、新型コロナウイルス感染症・インフルエンザ等へのり患により、出席できない学生に対し、zoom を用いて遠隔配信により対応したケースもある。)本年度の授業計画は、表1のとおりである。

表1 教育学部学校教育教員養成課程「大学入門ゼミ」授業計画(実施分)

回	月・日(曜日)	内 容	
1	4月10日(月)	(全体)オリエンテーション(授業説明・moodle 設定と活用説明) 領域振り分け当初希望調査・学校園訪問希望調査 等 入学後約1週間の大学生活について	415講義室
2	4月17日(月)	小豆島一日研修 事前指導	415講義室
3・4 5	4月22日(土) or 23日(日)	小豆島一日研修	
6	4月24日(月)	<b>[共通コンテンツ①] レポートの書き方</b>	415講義室
7	5月08日(月)	(全体)学校園訪問 事前指導  (最終課題事前周知)「学校園を探究しよう」全体説明+授業支援システムの使い方 (組別)探究課題を設定しよう ~学校園訪問の注目点も含めて考えよう~	415講義室
8a	5月15日(月)	(選択)附属幼稚園 訪問 ※附属中学校を訪問する受講生は休講	
8b	5月22日(月)	(選択)附属中学校 訪問 ※附属幼稚園を訪問する受講生は休講	
9	5月29日(月)	附属幼・附属中 訪問成果交流+次回訪問に向けた観点整理	
10	6月05日(月)	<b>[共通コンテンツ②] プレゼンテーションの方法</b>	415講義室
11	6月12日(月)	<b>[共通コンテンツ③] 情報整理の方法</b>	415講義室
12	6月19日(月)	(全員)附属小学校 訪問	
13	6月26日(月)	<b>[共通コンテンツ④] 日本語技法</b>	415講義室
休講	7月03日(月)	(授業時間外学習活動 集中組日)「学校園探究」プレゼン作成・発表練習①	
14	7月10日(月)	「学校園を探究しよう」プレゼン中間報告・発表練習(相互検討)	
休講	7月17日(月祝)	(授業時間外学習活動 集中組日)「学校園探究」プレゼン作成・発表練習②	
15	7月24日(月)	「学校園を探究しよう」組交流・発表会 授業評価他	HR 講義室

共通コンテンツを授業内で取り扱うだけでなく、それらの授業を通して得た知識・スキルを活用する機会をいかに設定するか、また遠隔授業においても、対面授業に近い授業参加感・達成感を受講する学生に味わわせることを意識した授業方法の工夫についても、引き続き検討したい。

併せて担当教員からは、「moodle などを含めた ICT の基本的な操作(大学生として必要なスキル)については、学生が自主的に閲覧・確認できるわかりやすいマニュアルなどを準備し、自学の「共通コンテンツ」としていただけないか。」「DRI をいかに大学入門ゼミにおいて取り扱うか、有効な手法なども大学入門ゼミハンドブックに載せていただきたい。」などの意見が寄せられている。学

部を超えて共通実施する「大学入門ゼミ」の中で、受講する初年次学生にどのようなICT活用スキルを付けさせるのか、またDRIを各学部における学びにいかに関係づけることが望ましいのか。「大学入門ゼミ」を指導担当する教員に、次の時代への新たな指導対応が求められていることを感じている。

今後とも引き続き、大学生として必要な内容の精選、本学学生の事例を挙げるなど授業法の工夫、ならびに、全学共通コンテンツ相互の連続性を持たせるなどの授業実施上の工夫を行いつつ、一方では学生の直近の必要性だけでなく、学生自身が「学ぶことの意味」を感じ考えられる授業として、「大学入門ゼミ」を実施していきたいと考える。

## 2023 年度大学入門ゼミ実施報告書【法学部】

### 1. 実施の概要

本年度は、8 クラス開講し、一学年約 160 名であるため、1 クラス 20 名程度の規模で実施した。教員は分野の偏りが無いよう配慮しながら毎年ランダムに割り当てられ、キャンパスアドバイザー（CA）制度と連動させることで、学生が 3 年次からの専門演習に入るまでの間、入門ゼミ担当者が面談等のケアをすることになる。

本年度開講されたテーマと担当者は、以下のとおりである。

- ・大学生活と（刑）法（天田 悠）
- ・アカデミックスキルの実践（春日川 路子）
- ・法学部で必要な基本スキルを学ぶ（辻上 佳輝）
- ・アカデミックスキルの実践（堤 英敬）
- ・グローバルな諸問題を考える（鶴園 裕基）
- ・法律学への誘い（溝渕 彰）
- ・グローバル化と法・政治（山本 慎一）
- ・日本国憲法はいかにして作られたか（山本 陽一）

入門ゼミの内容は、各担当教員が上記のテーマに沿って個別に指導をする部分と、共通コンテンツとして「情報整理の方法」「日本語技法①・②」「レポートの書き方」「プレゼンテーションの方法」を実施する部分に大別される。共通コンテンツの内容は、各担当教員のシラバスにも明記し、概ね第 1Q 期間の演習でひととおり取り扱っている。

さらに、法学部特有の内容としては、法学部資料室（法学部棟 3 階）と香川大学図書館の利用方法の解説の回を、各クラス必ず入れている。これは、法学・政治学の学習にあたって重要な位置を占める文献資料の検索・収集方法を初年次に身に付けさせる意図がある。また、大学入門ゼミの全受講生を対象に、犯罪被害者が抱える問題をテーマにした心理カウンセラーによる講演会（本年は 5 月に実施）を開催し、規範意識と倫理観の涵養を促すとともに、レポート提出を義務づけて添削指導の機会を設けている。

### 2. 学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

アンケートによる学生からの評価は、共通コンテンツの内容自体は、大学での学習にとって基礎的なスキルを修得する機会であり、概ね好意的な評価が多かったように思われる。担当教員によって教授方法や比重の置き方は様々であり、共通コンテンツの中身や担当教員のクラスによっては、特にレポート作成の教授・実践方法、討論の機会など、もう少しこれらに時間を割いて欲しいという意見も見られた。

実際には、受講学生のレベルが様々であるため、共通コンテンツに対する理解度や必要性も多様であり、アンケート評価にもばらつきがある。しかし、共通コンテンツ自体は、香川大学生としてのアカデミックスキルを習得させる貴重な機会として、共通の枠組みを維持して初年次学生に対して提供することの意義は認められよう。

また、このアンケート結果を担当教員および次年度に担当予定の教員の間で共有し、画一的な教授方法ではなく、少人数教育の特長を活かしてきめ細かな指導のあり方を検討し、実施していくことが必要と思われる。

### 3. 教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

学部において大学入門ゼミの導入当初は、一部で、共通コンテンツを実施せず、共通コンテンツの内容を反映させた教員独自のコンテンツによって少人数教育を実施したクラスがあったものの、それから一定期間が経過し、全クラスで共通コンテンツの内容をシラバスに明記し、演習の中で実践することが定着した。これは共通コンテンツの意義や有用性が、教員間にも一定程度理解されるようになった証左であるといえよう。

他方で、教員アンケート結果を仔細に検討すると、共通コンテンツの中でも担当教員によって評価が分かれる点があるのも事実である。多くの教員に共通する点としては、『大学入門ゼミハンドブック』を基にただ口頭で方法を教えるだけでなく、実践を通して反復させながら身に付けさせるのが重要という点であり、共通コンテンツの内容を一通り教授した後も、各ゼミのテーマに合わせて担当教員が工夫を凝らしながら指導している実態がうかがえる。

学生アンケートと同様に教員アンケートについても、各担当教員にアンケート結果のフィードバックを行うとともに、次年度に担当予定となる教員に対しても、共通コンテンツの教授方法・内容についての心構えとして、アンケート結果の内容を共有することは有益であるため、担当者が決定次第、実施する予定である。

#### 4. 改善すべき点等

教員アンケートの結果から、法学部の特徴として、日本語技法を教えることの重要性を指摘する担当教員が多い。近年はスマートフォンの普及によって、相対的にPCの利用が減っていることもあり、学生の文章力が総じて低下しているようにも思われる。このことは、レポートの質や期末試験の回答状況に対して大きな影響を及ぼす。かような現状を踏まえて、PC 必携化、DRI 教育、生成系 AI (ChatGPT 等) との付き合い方といった要素も採り入れた、新たな『大学入門ゼミハンドブック』の制作を検討していただきたい。

以上

## 大学入門ゼミ実施報告書 経済学部

### 1. 実施の概要

令和5年度の経済学部の開講数は昼間 12 クラス・夜間1クラスで、担当教員数は各 12 名・1 名、1 クラス教員 1 名で実施した。学生のクラス分けに際しては、今年度も同じ名前の学生が重ならないよう配慮した。

経済学部では例年 1 月に大学入門ゼミ担当者全員で打ち合わせを行い、共通シラバスの確認、共通コンテンツの内容や、15 回のスケジュールのすり合わせなどについて話し合いの場を設けている。その打ち合わせで共有された主な内容として、共通コンテンツの教え方は各クラスの担当教員に任されているが、「レポートの提出(1回以上)」「PPT を使ったプレゼンテーション(1回以上)」「教員へのメール送信」を最低限行い、それにより成績評価に反映させること、成績がクラスによって偏らないように配慮することなどがあげられる。また、新型コロナウイルス感染症も落ち着いていることから、授業のうちの 1 回を栗林公園などの学外研修に行くことも可能とした。

7 月 25 日には、第 6 クラスを担当する二ツ山達朗教員が、全学共通科目としての授業公開を行い、10 名程度の教員が見学を訪れた。同授業では、「日本学術会議に登録されている学会のなかから一つを選び、学会の概要とともに学会雑誌の一論文について紹介すること」というプレゼンテーションが課され、8 名ほどの学生が発表を行ったが、見学した教員からは、レベルの高さに驚いた、課題の設定が非常に参考になった、などの意見があり、大きな反響を得た。

### 2. 学生アンケート(共通コンテンツについてのアンケート)結果についての所見

学生アンケートでは、「レポートやメールの書き方、特に日本語の正しい用法、参考文献の書き方を学べることができ、社会人に向けての初歩的なステップアップをすることが出来た」といった意見や、「プレゼンテーションの方法を色々教えて頂いてとてもためになった。」などといった意見があった。これらのように、レポートの書き方、メールの書き方、プレゼンテーションの方法について言及する学生が多く、それらの事柄を共通コンテンツとしている成果と思われる。それ以外には、グループワークなどを通して、友人をつくることのできたなどといった意見もあった。

### 3. 教員アンケート結果(または反省会での意見交換)についての所見

各教員が共通コンテンツの教育方法について工夫していることがアンケート回答からわかる。「全学共通コンテンツは薄めにして、オリジナルの部分を増やした。」「学生が楽しめるようにアイスブレイクやグループワークを多めに取り入れた」とあるように、各教員が工夫をこらし、授業を行った。

「大学入門ゼミ」の教育効果として、「正直、あまり効果を感じない。2年次以降の講義では、レポートの形式を守らない学生が多い。レポートや卒論の執筆にあたって、引用のしかたや参考文献の示し方などを改めて説明する必要がある。」といった意見もみられた。一方で、「2年生以上の全員に「大学入門ゼミ」の内容が全て身につけているわけではないが、そもそも一度では習得できないのが普通であり、「大学入門ゼミ」の教育的な意義は大きいと考えている。」との意見もあった。

#### 4. 改善すべき点等

学生からは「グループ活動をもっと増やしてほしい。」「もっと生徒間の交流を増やしてほしい。」などの意見があった。また、これとも関連して、「他のクラスと内容を似せて欲しい」「教員によって課題や実施する事柄が大きく異なる」などの意見があり、学生間で他のクラスの授業内容を情報共有している場合があり、クラスのあいだでの内容の差、グループワークやフィールドワークの差について言及する学生が散見された。共通コンテンツ以外の授業内容を各教員に任せている利点でありつつ、その代償と思われる。

教員からは「情報整理の方法やプレゼンのジェスチャーなど、いくつかのコンテンツを不要だと感じた」「2022年度版と比べてプレゼンテーションの方法が全面的に改訂されているのが気になった。スライド作成の具体的なポイントやツールの変化が含まれたのは良かったが、他のスライドとの形式の統一や内容の構成・表題等は今後再検討が必要ではないかと思われる。」などといった意見もみられた。

文責・ニツ山



## 大学入門ゼミ実施報告書 2023 年度(医学部・高橋弘雄)

### 1. 実施の概要

学生に対する希望調査により医学科学生(109名)を4ゼミ教員計5名で担当、看護学科と臨床心理学科の合同で両学科学生(84名)を3ゼミ教員計8名で担当した(医学部受講全学生数194名、前期全15コマ)。

	担当者	クラス規模
M(1) 医療のなかの核酸	栗原亮介	28人
M(2) 生体における塩と水の機能	北田研人・RAHMAN MD ASADUR	27人
M(3) 医学研究における動物実験と動物倫理	伊藤日加瑠	27人
M(4) 生物学におけるアカデミックリテラシー	高橋弘雄	27人
M(5) 日本語の技法と情報倫理	藤井豊・辻京子・川田紀美子	28人
M(6) 双方向学習のスキルアップ	市原多香子・渡邊久美・松本啓子	28人
M(7) 医療における心理学	川人潤子・野口修司	28人

### 2. 学生アンケート(共通コンテンツについてのアンケート)結果についての所見

学生アンケートでは、プレゼンテーションの方法に関して、特に有用であったという意見が多く寄せられていた。パワーポイントを使ったプレゼン資料の作成や、実際にプレゼンテーションを行う機会を持てたことなどが、今後の大学生活に生きるという評価が多かった。一方で、プレゼンテーションを行うための準備時間がもう少し欲しかった、パワーポイントを使用する際のより具体的な技術を知りたかった、などの要望もあった。レポートの書き方に関して、今まで書き方を学んだことがなかったのが有益であった、という意見が多く見られた。最初にレポートの書き方の講義をやって欲しい、という要望もあった。日本語技法の中では、特にメールの書き方に関するポジティブな反応が多く、学生が大学入学に伴い、目上の人にメールを書く機会が増加する実態にマッチしていると思われる。全体的に、大学生活の最初の段階でアカデミックリテラシーに関わる共通コンテンツを学ぶ機会を持てたことは有益であった、というコメントが多く、講義の目的が達成されていると感じた。

### 3. 教員アンケート結果(または反省会での意見交換)についての所見

教員アンケートより、全学共通コンテンツを教える際には、理解しやすい事例を盛り込む、学生が意見を言う機会やグループワークに時間を割く、基礎的な所では特にグループワークをはさむ、などそれぞれの教員が工夫して講義を行っていた。一方、グループワークを行う時に、一部にやる気のない学生が出てしまうことを課題とする意見が散見された。ともすればやさしいと感じられてしまう共通コンテンツを扱う上で、学生のモチベーションを上げる更なる改善を続けていくことが重要であろう。

### 4. 改善すべき点等(もしくは『大学入門ゼミハンドブック』についての意見)

大学入門ゼミハンドブックに関しては、講義に非常に役立ったという意見が多く、ハンドブック内で紹介された参考図書を購入して講義資料の作成に活かしたという声も聞かれた。

## 大学入門ゼミ実施報告書(創造工学部)

### 1. 実施の概要

創造工学部は7コースに分かれており、そこでの開講数はT1~T16の16クラスである。授業担当者は1年生CAの16名であり、クラスの規模は20名前後となっている。創造工学部で大学入門ゼミを開講するにあたっては、本年度の大学入門ゼミを担当する全教員と日程や実施方法について3月28日にメールで相談し、全体の合意を取りつつ実施している。その中でも可能な部分は合同開催とし、コース間、クラス間で相互に協力しながら実施している。

第1~5回は創造工学部全体で同様の内容を行うこととし、以下のようにコース間またはクラス間での合同開催とした。

- 第1回 4/12 大学入門ゼミ授業ガイダンス(各コースで実施)
- 第2回 4/19 図書館利用講習(各コースで動画視聴)
- 第3回 4/26 保健管理センターからの講義: 2限(4コース合同)と3限(3コース合同)で対面実施(幸町は遠隔配信)
- 第4回 5/10 令和4年度基盤力テスト(各コースの部屋で同時に実施)
- 第5回 5/17 高松南署からの講義: 2限と3限で対面(幸町は遠隔配信)

外部講師を招き、大学生活を送るうえで重要な知識やスキルを得られる機会を設けるようにした。具体的には、第3回 保健管理センター講師による「キャンパスライフ入門~大学生のメンタルヘルス~」に関する講習、ならびに第5回 香川県警の現職警察官による「生活安全・交通安全・防犯」の講習を順次おこなった。その後、各コースでの共通コンテンツ教育ならびにコース毎の独自カリキュラムを実施した。また、第4回の基盤力テスト(全学共通学力テスト:大学に入学したばかりの新生が、理系の基礎知識をどの程度身につけているのかを客観的な指標をもとに測ることができるテスト)に関しては、本学部では例年大学入門ゼミの4月末から5月始めを利用して実施しているものである。

第6~15回に含まれる全学での共通コンテンツ(講義5回分)の教え方は各コースに一任されているため、「情報整理の方法」(1回)、「レポートの書き方」(1回)、「日本語技法」(2回)、「プレゼンテーションの方法」(1回)についての講義は、コースごと、授業担当者ごとに教育上で様々な工夫がなされている。例えば、日本語技法において、チャットGTPを使って作成したメール文をそのまま教員宛に送信する事例を紹介し、使い方とマナーについて解説しているクラスもあった。これは近年身近になったAI技術などの情報化社会に対して大学生らしい素養を身につけるための時代に合った試みである。

### 2. 学生アンケート(共通コンテンツについてのアンケート)結果についての所見

高校時代までには、専門的にレポートの書き方やプレゼンテーションの方法について習った経験がなかったが、大学に入学してからレポートの提出やプレゼンテーションをする機会が増えたため、「レポートの書き方」や「プレゼンテーションの方法」といった共通コンテンツが役に立ったという意見が多かった。「日本語技法」や「情報整理の方法」に関しても役に立ったという意見が見られたが、レポートやプレゼンテーションほどではなかった。しかしながら、日本語技法や情報整理に関してはレポートの書き方に生かせる部分があるため、レポートの書き方と並列して

日本語技法や情報整理が勉強になったと記載している学生がいたことから、コメント数以上に日本語技法や情報整理についても有意義になっていると推察される。以上のことから、共通コンテンツの構成的として、この4項目で問題ないと感じた。

改善点としては、講義で役に立つのでレポートの書き方やプレゼンテーションの方法の時期を早くしてほしい。また、講義の資料を配布したりMoodle上にアップしてほしいという意見があり、検討する必要があるように思える。

### 3. 教員アンケート結果(または反省会での意見交換)についての所見

担当教員からの意見として、有意義な講義であると感じているようであった。また、「大学入門ゼミハンドブック」を講義資料として、オンラインのコンテンツ化を勧める意見があり、学生の「講義資料を配布して欲しい」という意見と一致していると考えられる。共通コンテンツの資料配布に関しては、やはり進めるべきと思われる。

共通コンテンツの内容が、全学部に通ずるような内容になっているので、一部の担当教員では、理系学生が留意する点を補足するように工夫されていた。講義資料に関しては、Moodle上でもカスタマイズが許容されているように、学部特有の内容補足が推奨されるように、前もって担当教員に連絡するべきだったと感じた。学生アンケートの意見の中に、レポートの書き方やプレゼンテーションに関して、より実践的なものを求めている学生もいたことから、可能な範囲で内容をカスタマイズして専門的なものも対応できるとより望ましいと思われる。

### 4. 改善すべき点等

改善を検討すべき内容として、すでに「レポートの書き方やプレゼンテーションの方法の開講時期」「共通コンテンツの資料配布」上げさせていただきました。この他に、今回が特別かもしれませんが、4月に入ってから、アセスメントテスト学修用Dコンテンツの視聴依頼が来ました。できれば、シラバス作成前に担当者に意向を連絡するほうが良いと思われます。

文責 楠瀬

## 1. 実施の概要

令和5年度、農学部における大学入門ゼミの開講数は、下記の表1に記載の10クラス(A1～A10)で実施した。担当教員は、10名であり、全員新入生のアドバイザー教員(クラス担任)である。2021年度から農学部では、学生支援の観点から新入生と身近なアドバイザー教員の距離を短くすることが効果的だと考えられ、新入生のアドバイザー教員が大学入門ゼミを担当している。

クラス	受講人数	講義題目
A1	15	持続可能な農業を考える(A)
A2	16	持続可能な農業を考える(B)
A3	17	異分野融合の場としての農学部A
A4	16	異分野融合の場としての農学部B
A5	16	微生物バイオテクノロジー入門
A6	16	2050年の食について考える
A7	16	大学入門ゼミ サイエンス事始めA
A8	16	大学入門ゼミ サイエンス事始めB
A9	16	身の回りの農学A
A10	15	身の回りの農学B

実施内容に関しては、各クラスの講義題目のテーマに沿いつつ、その中で大学での学びや研究活動に必要となってくる全学共通コンテンツ「情報整理の方法(情報収集の一環として図書館訪問も実施)」、「レポートの書き方」、「日本語技法」、「プレゼンテーションの方法」を、順番や回数を変更して教えている(なお、一部のコンテンツについては、2クラス合同で実施された)。具体的な授業内容は、各クラス担当教員の主体性に基づいて進行されているが、クラスによっては、コンプライアンスに関する授業、学生がAIを利用するにあたっての注意事項、ポスター形式のプレゼンテーション、ミニ実験・実習などのコンテンツを取り入れているケースもあった。さらに、全クラスにおいてグループワークを取り入れて、学生の繋がりを促進するための取り組みがなされた。

また、農学部では複数の担当教員が成績評価を行うことから、会議を行い、担当教員間でその評価基準を共有した。なお、会議の際には、各クラスの実施状況等についても情報交換がなされた。

さらに、農学部では、独自の実施報告書として、大学入門ゼミの実施終了後、各クラスでの実施概要、関係するコメント、次年度への申し送りコメント等を担当者から提出してもらうようにした。

## 2. 学生アンケート(共通コンテンツについてのアンケート)結果についての所見

Q1) 上記のスキル教育を受けて良かった点は何ですか?について:各クラスとも、メールの書き方、レポートの書き方、プレゼンテーションの仕方などの大学生にとって「必要なスキルの基礎を学べた」、「他の授業等でも役に立った」などの意見が見られ、一定の教育効果があったということが判断できた。

Q2) 上記のスキル教育で授業に対して改善を望む点は何ですか?について:受講生の個人差はあるもののプレゼンテーションに対するコメント(PowerPointの有効的な使い方、スライドの作り方、話し方など)が比較的多く、プレゼンテーションの仕方について改善の必要性が考えられた。

Q3) その他としては:これからの大学生活においてとてもためになったとの意見が多くあり、今年度大学入門ゼミは概ね順調に実施されたと考えられた。

### 3. 教員アンケート結果(または反省会での意見交換)についての所見

Q1)「全学共通コンテンツ」を教えてみて、考えたこと・感じたことについて:クラスを分けて実施しているが、足並みを揃えて実施する必要があるとの意見や全学共通コンテンツ自体の内容・在り方についての意見があった。

Q2)「全学共通コンテンツ」を教える際の工夫について:全学共通コンテンツの講義資料について、学生の興味を促すようにカスタマイズしたり、作り直されて使用されている場合が多いように見受けられた。また、グループワークや発表の加点化を取り入れることにより、学生が積極的に授業に参加できるような工夫がなされていた。

Q3)「大学入門ゼミハンドブック」について:たいへん勉強になった。共通の PowerPoint 資料があるので助かったとの意見があった。

Q4)「大学入門ゼミ」の教育効果について:研究室に所属する頃(3年生)の学生を見ると、大学入門ゼミのコンテンツを忘れていたりまたは十分に修得できていない等の意見があった。一方、受講生間で差があるが、様々な技法等について良くなったとの意見もあり、一定の教育効果は出ていると考えられた。

Q5) 大学入門ゼミの全体に関して、改善すべき点等について:教育効果が見られていることや、今後の大学での学びや研究活動に必要となってくる重要な内容であることからじっくり時間をかけて実施するべきとの意見もあり、受講生の能力向上を目指し、改善を図りながら継続することが重要であると考えられた。改善すべき点等としては、全学共通コンテンツの資料について、農学部では多くのクラスにおいてカスタマイズされたりして使用されていることから、そのアップデート等が必要であろうと考えられた。また、成績評価に関して、通常科目とは異なることから、「合」・「否」でもいいのではないかとの意見もあった。

### 4. 改善すべき点等

農学部では、大学入門ゼミの実施は各アドバイザーと直結していることもあり、毎年担当者が変わる。そのため、前年度の効果的な点や改善したほうがよい点のなどについて上手く引き継ぐ必要があると考えられた。そこで、今年度、農学部独自の大学入門ゼミ各クラスの実施報告書を提出してもらい、今後の大学入門ゼミの改善や次年度のシラバス作成等に向け、活用できるようにした。

また、全学共通コンテンツ資料(大学入門ゼミハンドブック)に関して、コンプライアンスに関する項目や学生がAIを利用するにあたっての注意事項等について加えていく必要があると考えられた。

最後に、学生間において差はあるものの、3年生以降の研究室等に所属する頃(就職活動に入る頃)には、入学時の大学入門ゼミで学んだ内容を忘れていたり(もしくは十分に身に付いていない)状況が見受けられる。よって、今後、このような状況を、改善するための方策や工夫についての検討が必要であると考えられた。